

潮騒通信「どっこい生きてます！」

国際化するダルクの意味～ソウルダルク開所式に参加して

5月末から6月初めに掛けて韓国を訪ね、この国に初めてできた「ソウルダルク」の開所記念イベントに参加してきました。日本で生まれたダルクが隣国にも普及したことに、ダルクの国際化を意識しました。既に東海地方のダルクが支援して「トルコ・イスタンブールダルク」が活動していることは耳にしていました（ソウルダルクも三河ダルクが母体です）。私自身も一昨年、米国で開かれたAA世界大会に参加して、改めて依存症問題に国境はないことを実感させられました。

私は韓国の薬物・アルコール事情に詳しくありませんが、日本と同じくアルコールについては寛容な風土のようです。儒教的な教えが下地にあるせいか自己責任論が根強く、国民の依存症についての認識は日本よりも低いように思います。薬物についてはなおさらで、治療を受けられる病院や医師が不足しており、加えて民間のリハビリ施設もないため、薬物やアルコール依存症者の間から韓国にもダルクをつくってほしいという声が上がっていたようです。

ご承知のように、近藤恒夫さんがつくったダルクは依存症治療の先進国、アメリカの「治療共同体」がモデルです。そのため、日本の常識を超えたところがダルクの“生命”です。例えば、今苦しんでいる当事者こそが主役で、支援の専門職はその下支えの脇役にすぎない、仲間同士で上下関係をつくらないフラットな関係の中でこそ回復できる、建前だけの規約や規則を取り払って何度でも失敗（スリップ）を認める—これらは日本的な固定観念に縛られている限り、出てこない発想です。

その近藤さんが以前、こんな話をしてくれました。「ぼくは元来、根気がない。一つのことをやるのが苦手なんだ。唯一の例外がダルク。こんなに（27年も）長く続けられたのは、何よりも自分の問題だったから。他人のためじゃなく、ぼく自身が薬物依存から回復するためにダルクは必要だった。ただ、ダルクに対してはあちこちで風当たりがとても強くてね。それで息苦しくなると、海外に飛び出して外の空気を吸ってくる。そうして気分をリフレッシュして、また日本に戻ってくる。ダルクを続けられたのは、これを繰り返してきたかもしれない」

近藤さんの軌跡をみると、東京、沖縄、アジアへと活動を拡大しています。今も自助グループなどの国際的な集まりには寸暇を惜しんで出かけています。ほぼ同年代の私には、とても勇気づけられる存在です。ただ、私にはハイヤーパワーによって与えられた私の使命があります。鹿嶋の地で地道に仲間の手助けをすることです。日々の活動に追い立てられてばかりなので、私も息苦しさを覚えたら海外（というより県内の温泉地にでも出向いて）で「外の空気」を吸って来ようと思います。依存症の回復に国境はない—閉塞感に満ちたこの国の現状を打開する道は、ダルクの流儀のようにまず自らを「外に開く」ことかもしれません。（施設長 栗原 豊）

SJTC

SHIOSAI JOB TRAINING CENTER

2012年

6月号 一部 100円

Contents

- P1 ダルク国際化の意味
- P2 潮騒視察研修相次ぐ
- P3 フォト特集・施設研修
- P4 施設内ミニフォーラム
- P5 プロジェクトに参加して
- P6 施設の話あれこれ
- P7 読者からの感想意見
- P8 我が回復物語&詩
- P9 近藤恒夫氏連載・2
- P10 受刑者からの便り
- P11 しおさい文芸コーナー
- P12 行事予定&献金献品



県内外の2団体が視察研修のために潮騒を訪れました

吉川市民生・児童委員、ひたちなか市更女会が来所

=潮騒JTCへの視察研修相次ぐ=



視察研修に訪れた埼玉県吉川市民生・児童委員生活福祉部会の皆さん＝潮騒JTC本部で訪問は大歓迎です。事前にご連絡いただければ、日程に合わせて対応致します。

さて、今回は5月下旬に埼玉県吉川市民生・児童委員生活福祉部会（竹内盛部会長）の一行27人が来所されたのに続き、6月初旬にはひたちなか市更生保護女性の会（菅原佳江会長）のメンバー19人がおいでになりました。それぞれ宮津台の本部施設で暮らす入寮者の様子を視察されました。食堂、浴室、ミーティング室、個室などを回られ、入寮者の生活ぶりも興味深くご覧いただきました。

また、新たに確保した鹿島神宮近くのデイケアを中心とした4階建て施設（現在、内装整備を進行中）の会議室で2団体との交流会がもたれました。施設の概要を知っていただくために独自制作した潮騒のDVD作品をスクリーンに映し出したほか、栗原施設長が概要説明に当たりました。両団体とも約2時間ほどの限られた滞在でしたが、意義ある研修となったようです。

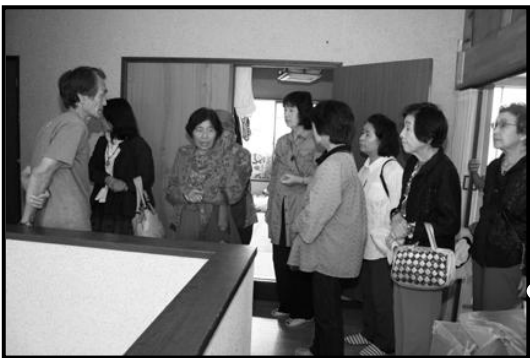
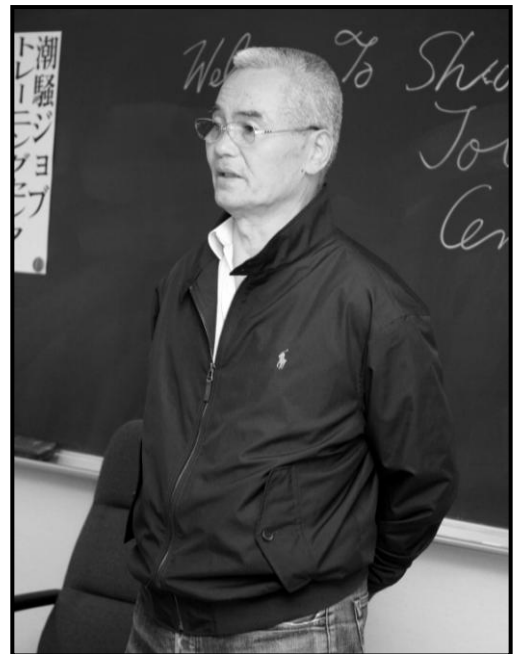
参加者の皆さんからは「こんな住宅地の中であって、潮騒の進出に反対する動きはなかったか」「どんなきっかけで依存症に陥るのか、後遺症は出ないのか」「なぜ、やめられなくなるのか、とりわけ女性は性の問題が絡んでやめにくいと聞くが…」「治らない一生の病気というが、回復を支えているものは何なのか」「平均的な入寮期間はどれくらいか」—など積極的に質問が寄せられました。

これらに対して栗原施設長は「反対運動は宿命でもあり、私たちが地域で受け入れられるかは社会の問題。時が熟すのを待つしかありません。やめられなくなるのは脳や体が覚えてしまうためで、その意味で生涯治療の病気です。後遺症にも悩まされ、施設でも回復率は悪いのですが、12ステップを通じてやめ続けることを学んでいます。大事なことは薬物やアルコールとの果てしない戦いに無力を認め、そこから降りてありのままの自分を受け入れることです」などと説明しました。



潮騒を訪れたひたちなか市更生保護女性の会の皆さん

施設訪問フォト特集



ファイザープロジェクト・ミニフォーラム開く

潮騒JTCは今年、ファイザープロジェクト（ファイザー製薬助成事業）により、実効性のある就労プログラムの開発を目指して各種事業に取り組んでいます。その途中経過について話し合うミニフォーラムが5月30日、鹿嶋市まちづくり市民センターで行われ、プロジェクトに参加した入寮者から感想が発表されました。潮騒の入寮者にはアルコール依存症が多く、過去に何らかの仕事をした経験があるため、就労環境を整えて一定の職業訓練をすれば社会復帰に道が開けるだけに、この日は就労に向け希望を感じさせる発言が相次ぎました。

◆みんな仕事をやって生き生き

急斜面の山林で材木伐採に従事したタカさんは「一人ひとり責任を持ってうまくいった。みんな仕事をやって生き生きして笑ったりしていた。仕事を覚えれば自分のものになる」と語った。荒れ地開墾に従事したナカさんは「畑の開墾をやるときに『ジャングルみたい』と思った。大変だったのがチェーンソー。軽いから重いまであり重かった。いろいろ免許を持ったが（以前勤めていた建設会社でしか通用しないものもある）持っている分責任が重い。ユンボを動かしている仲間がいたが、社会にいたときに動かしていた経験が役立った。達成感を感じている。施設の中になると活気がなくなり『ただいるだけ』になってしまう」と達成感を感じていました。



施設内でのパソコン教室に参加しているエンさんは「目標はニュースレター作りにかかわりたい。仲間とやっていくうちにいいプレッシャーになる」と前向きの姿勢を見せました。米作りに参加しているヒコさんは「米というのは経験と長い年月を経ないと作れない。米は自然に左右される作物。米が安くて（農作業）機械が高い。若い人は農業から離れる」と指摘し、「順調に育っているのでこの秋には収穫できる。秋には美味しいお米と一緒に食べたい」と希望をのぞかせていました。

◆「潮騒ジョブ猿田農場」を作りたい

会場では支援者からも意見が出され、畑の開墾を支援したマスコ測量の増古四郎会長は「荒れ地を開墾し、600坪（約2000平方メートル）のうち、300坪にサツマイモを植える。夏にはダイコンを植えたい」とした上で、「ダイコンは大根漬けに、サツマイモが保存して焼イモにしたい。農場を『潮騒ジョブ猿田農場』としたい」

との構想。パソコン指導の佐藤修さんからは「基本は文字入力から教えている。いろんな問題が出ているが、徐々に解決していきたい」との報告がありました。

入寮前に社会で活躍していたコバさんは「歯科技工士の資格を持っているが、生活は破たんし家庭は崩壊した。資格のある健常者もいっぱいいるしハンデを抱えている。（まだまだ働ける、という）ある程度の手ごたえを感じなければ分からない。ハンデはあるが可能性もある」と語ってくれました。

いくつかの職を転々とながらも危険物関係の資格を取得したリュウジさんは「お酒が止まらなかったのは自分の大きな問題。（施設で）現場仕事に出たが、気晴らしにはなった。『楽しい』と思えるようになるには、（仕事を）楽しまなければ。こもりっぱなしだと、悶々

として余計なことを考えてしまう」と語り、9年間自衛隊に在籍したチョーさんは「大型、大特（大型特殊免許）は取った。調理師は取らなかった。手に職を持っていれば良かったと思う」と、「手に職」の必要性を訴えていました。スタッフのヒトシさんは「全員参加が目標。この前の田植えが感動的だった。人として成長するには大切なものではないか。今年は1年目でたたき台だが、みんなの協力が必要」と、全員参加を改めて訴えていました。

◆困難な課題も浮き彫りに

ただ、潮騒では世相を反映して高齢入所者が急増しているのに加え、重い精神症状を併発しているケースが多くなり、ほとんどが生活保護頼りなのが現状。この生保問題が制度本来の趣旨に反して、生活自立や就労に向けての前向きな意欲を減衰させているという困難な課題を浮き彫りにしていました。（勝）

ファイザープロジェクトに参加して～入寮者の意見

★みんなで食べたおにぎりは格別★

ファイザープロジェクトで自分は、実務担当（庶務係）となりました。何をやっていいのかわからず戸惑いました。そんなある日、栗原施設長から「田植えをやるぞ！」の声。不安はありましたが、不思議と期待感もありました。農業経験者のヒコさん、支援者の根崎さん、井関さん達の指導の下、田植えプロジェクトが本格的に始まりました。見るのも・やるのも・全てが初めてで、こんなにも米作りには手間と時間が掛かるとは思ってもみませんでした。5月18日には仲間たちと田植えが出来るまでになりました。みんなで食べた昼食のおにぎりは格別でした。



田植えは初体験のヒトシさん。農業の大切さを実感

今まで、自分が生活している中で「農業」は遠い存在で、スーパーに行けば何でもあり、野菜や肉や米など「当たり前」に売っていて、子供の頃によく親に「お百姓さんが一生懸命作ったのだから、米粒を残しちゃダメよ」と怒られていました。実際自分が米作りをやってみると、その意味が痛いほど分かります。輸入や後継者問題などで大変な状態だと聞きましたが、どんなに便利な世の中になってきても。ずっと昔からやってきている農業が無くならないのはきっと、言葉では言い表せられない「大切な何か」があるのだと思いました。最初は不安で戸惑っていましたが。ふと気付くと、このプログラムで自分は価値観が変わりました。少しでも、仲間達とプログラムで何か得られればいいな、と思います。（ヒトシ）

★一番苦労したのは田んぼ造り★

私の部門は、仲間と一緒に米を作ることです。米づくりは農業学校や農業現場で何年か経験を積まなければ、すぐには出来ません。私は農家の長男として生まれ、子どもの頃から両親の元で農業を学んできました。今の農業は昔の手作業と違い機械が主役です。とても楽に出来、会社勤めが可能です。私は紆余曲折を経てアルコール依存症となり、農業も会社も止める羽目になりました。やむなく故郷を後にし、運よく潮騒につながりましたが、ファイザープロジェクトでまた農業をすることには抵抗感がありました。

しかし、自分の回復のためなのはもちろん仲間のためにも、今一度身に付けた農業を思い出しやってみることにしました。一番苦労した事は田んぼ造りでしたが、仲間と力を合わせてどうにか田植えに間に合うことが出来ました。仲間たちと共に取り組んだ田植えや植え直しに達成感を得ました。今は苗も青々とし潤順に成育しています。今年の秋は仲間と一緒においしいご飯が食べられるよう、稲の管理をやって行きたいと思っています。（ヒコ）



昔取った杵柄でトラクターを巧みに操作するヒコさんの勇姿？

施設の話題コーナー

「グリドルむっちゃん」が来店慰問…

……潮騒に6月3日、焼きそばなどの移動販売車「グリドルむっちゃん」(橋本睦夫店長)が来店。慰問を兼ねた店舗の



珍しい移動販売車の慰問に入寮者らが列を作りました

オープニングセレモニーが行われ、入寮者に焼きそばや唐揚げ、コロッケが振る舞われました。

同店は『『お金で寄付』ではない形での更生施設への支援』として開業し、この日が初営業でした。橋本さんの妻の光恵さんは、「社会復帰のために頑張っているみんなを応援したい。家族も大変でしょうが、希望を持ってあきらめずに頑張ってくださいです。みんなやり直せる人生を持っています」と潮騒への慰問で励ましてくれました。

昼前に調理が始まると、販売車付近には焼きそばソースや揚げ油などの匂いがたちこめ、以前露天商だった入寮者は「懐かしい臭い。また(屋台を)やってみたい」と社会復帰への意欲を示していました。用意した焼きそば(1*₀入り12袋)、唐揚げ(5*₀)、コロッケが振る舞われ、入寮者らは「こりゃおいしい」と舌鼓。中でも唐揚げは「柔らかくておいしい」と一番人気でした。今後は各地の更生施設などを慰問する予定。(サッキー)



ソフトボールを通じて何かを得る……千葉県鎌ケ谷市の秋元病院チームとのソフトボールの交流試合が5月24日にありました。自分はピッチャーを任せられ、4回までを先発で投げました。試合前の練習では、結構いいコントロールでしたが、いざプレーボールの声で投げ始めると、緊張してコントロールが悪くなりました。「これではダメだ」と思い、一球一球落ち着いて深呼吸をしてから投げると、次第にコントロール戻りストライクが入るようになりました。

「よし、これならいける」。1回表は0点に抑える事ができました。ところが2回表に打者一巡、結局8点を献上してしまいました。やはり日々の練習ができず、ぶっつけ本番だったこともあり、序盤は守備も全然ダメでした。それでも段々慣れてきて、みんなが感覚を取り戻す

と、守備もよくなりました。仲間の援護もあり、徐々に点を取り始め、追いついてきました。そうなってくると自分もがぜんやる気が出てきて3回、4回と0点に抑える事が出来ました。でも4回を終えて、もう体力も限界。ピッチャーを交代してもらい、自分はベンチにさがりました。ここ数年の運動不足で、自分のスタミナの無さを痛感させられました。

ベンチにさがっても、自分にはまだ仕事があります。それは仲間の応援です。仲間が緊張して力が入ってるなと思ったら、「楽にいこう」「落ち着いて行こう」と声掛けをしている自分がいました。いいプレーをしたら褒めてあげたりもしていました。そんな中、6回の裏には逆転に成功、これも仲間が一つになっていた証拠だと思います。でも7回表の最終回で逆転されてしまい、そのまま点を取り返す事ができず、負けてしまいました。

振り返ると、試合の間も試合の後もお互いに相手のチームも応援している姿を見て、いい試合だったと思います。やっぱり負けてくやしいのは当然ですが、終わってみるとすごくスッキリした気分になっていました。自分も日々の生活の中でストレスもたまっていたのですが、ソフトボールで自分の悪い部分を取り除かれたのかもしれませんが。今回、スポーツを通じて外部の人とふれあえる事で、自分の中で何か感じるものがあつたので、これからもいろんな人たちと触れ合いを持ち、そして自分の中にもどんどん取り入れて行こうと思いました。でも、負けたのは正直悔しい。もっともっと自分のピッチングとバッティングに磨きをかけて、次の試合では勝ちたいと思います。みんな、とにかくリベンジに向けて頑張っていこう。次は勝つぞ!! (ヤマ)



秋元病院との交流試合を終え、健闘をたたえ合う両チームの選手たち

「私にも言わせて」～潮騒通信・読者からの感想

拝啓 どうもありがとうございます。貴「潮騒通信」を頂きました。ありがとうございます。一面の巻頭言？ 拝見いたし、いろいろと考えさせられました。現代の日本の負？ 縮図を押し付けられていると存じました。施設長としてのご苦悩の程がよくわかります。大奮闘なのですね。「人間の尊厳」、施設長として貴施設がキーコンセプトとしてこれを大事に、今日まで運営してきているものと存じます。敬服の至りです。国の行うべき事をおやりと存じました。多くの困難と存じますが、どうぞ一層のよき展開をお祈り致します。 敬具
(東京都・竹内達夫様より)

5月号「潮騒通信」に目を通しました。栗原さんの言葉、問題点と苦悩を抱えながら仲間も一人でも多く、救済するという取り組みが伝わってきます。中学校での体験談講演活動も大きな光です。メンバーの社会復帰(貢献)活動と自立支援の取り組み。そして私が最も注目している近藤(日本ダルク代表者)のことばです。今号では「私の回復の権利」の謙虚な態度が印象的でした。人権とは、法や憲法に左右されない、人が生まれながらに有する権利という社会的認識ですが、でも、個人的には謙虚な態度で人権を捕えているところがポイントのようです。英語では権利を「ライト」というようです。正しいものという意味でしょうか。全人は罪人である、というのが私の思いですが、罪人にも善人にも人権は必要ですし、経済社会はそれを、むしろ難しくしている現状を私たちはどう考え、見直していくかが課題だと思います。

また、メンバーの回復物語も興味深いコーナーです。そして受刑者のことばも関心を持って目を通すコーナーです。最後のコーナーは文芸(俳句、短歌)ですが、選者のことばが、作品の理解を深める道しるべで楽しみです。文芸とは上手下手ではなく、その人の心にあるものを表現として表(社会)に出すことと、自分自身と社会と自然を見つめ、心を安定(バランス)させる、ちからがあり、心に豊かさと光を取り込む、最も手身近な方法の一つだと思います。もっと多くのメンバーが試みれば依存症改善にも有効のように思います。編集後記では「生活の恒常性」につき、論を掘り下げられていました。「今日一日」、今日いまを大切にする生き方は、万人にとり実に大事なことです。いまを、どう生きるかでその人の人生は大きく違ってしまふのでしょう。最新の詩を作りました＝下段右に掲載。(茨城町・白田美鶴様より)

4月誕生日の仲間たち



左からジュン、センジー、ヒサ、トム、長吉(手前)の皆さん

被曝

被曝をしたのは
人だけではありません
大地も山も川も海も
そこで生きている
草木も花も実も
微生物も虫も鳥も
明日も遠い未来の
全ての命たちも
被曝したのです
私たちはそれら全てに
謝らなければ
なりません
そして生き方を
改めなければ…

人生の道

人生の道は
真っ直ぐではなく
穴だらけです
しかも山路のように
気の抜けない
険しく危険な道です
でも 陽は照り
花も実も葉も
風に揺れ
大いなる力が
美しい眼差しで
人生をも
見守っています
何度倒れても
何度落ちても
光はあなたと一緒にです

【お願いします！】潮騒JTCでは使わなくなった中古パソコン、中古の車いす、中古自転車などの献品を求めています。回復活動や日々の生活に必要なので、どうかご協力をお願いします。

私は薬物を止めたくて潮騒ジョブトレーニングセンターに入寮しました。今は、なんとか仕事を持って社会復帰したいと考えています。潮騒もダルクと同じように 12 ステッププログラムを実践しています。

私も、まず薬物に対して無力だと認めるところから始めました。今では自分が薬物依存だとの思いが素直に認められて、それなりに依存症者としての自覚も生まれました。ただ、回復には時間がかかります。そのため、ダルクのなかでは「回復にはスリップが伴う」という言葉があります。回復に必要な一過程として考え、ダルクは辛抱づよく回復を下支えしてくれています。

潮騒もダルクと同じく社会にでるための訓練施設です。ただ、薬物依存症者が多数のダルクに比べアルコールの人が多いようです。それに潮騒では今年、名前の通り職業訓練や就労支援に力を入れ、全国のダルクの中では初めて、こうした分野を主テーマにしたファイザープロジェクト(大手製薬会社ファイザーの助成事業)にも取り組んでいます。

私も社会に出るには仕事をしなくてはならないと考えて、施設側が提案するボランティア作業に出ていました。ところが施設長からは(私が仕事プログラムに取り組むのはまだ早いと考えたのか)「明日からは作業には行かなくていい」と言われ、何がなんだか分からなくなりました。そうして自分に与えられたのは、(1 日 3 回の)スリーミーティングの生活と自分へのメンタル面のケアでした。私は数か月間、午前中は 9 時から 10 時半のダルクミーティング、午後はステップミーティング(1 時から 2 時半)、夜になると施設を出て各会場で開かれる自助会、NA ミーティングに出ていました。

我が回復物語(依存症のK)

午前中のミーティングでは、毎日違ったテーマで自分の棚卸をしました。自分の思った事や体験した事を話すことで自分の問題を知り、少しずつ自己改善をしてきました。午後のミーティングでは、12 ステップについて勉強しました。一番重要なのはステップ 1 で、自分の無力を認めること。ステップ 2 は自分を超越する偉大な力(=ハイヤーパワー)を信じること。ステップ 3 はハイヤーパワーに自分を「お任せ」する事。つまり自分を薬物依存だと認め、自分の力だけではどうにもならない事を知る。そして自我を使うのではなく、お任せをする事でした。

夜の NA ミーティングでは、薬物依存問題を抱える外部の仲間からのメッセージや教えを聞く事で、いろんな刺激を受け、自分も同じように回復したいという励みになりました。ここでも、司会者が任意のテーマを決めて、言い放し・聞き放しのスタイルで話を交わす事で、お互い相乗効果をもたらします。

メンタル面のケアは少しずつ自分を変えながら、仲間の手助けをし、良いことは受け入れてきました。こうした自己の内面を変えていく試みは、相手にも自分にも良い刺激になるし、社会では考えられなかった事です。こうした取り組みは自分だけではできません。仲間の力が必要なのです。そのためにも社会復帰を目指すリハビリ施設が重要です。自分と向き合うための時間があり、同じ病気を持つ仲間の存在が身近にあるからです。

私は今後も潮騒 J T C の力を借り、自分自身のケアと薬物依存症の回復を目指して地道な努力を続けて行きます。そうして将来の社会復帰を夢見て、今の自分はボランティア作業が与えられた事を素直に受け入れています。自分ができることをして来ました。今はスタッフ会議にも参加し、回復を続けていくつもりです。

潮騒ブルース

石津 信子

一、沖に浮かぶ 白い船

俺の夢も乗せてくれ

高波 荒波 覚悟の上で

人生 航路 今船出

ここはトレセン

潮騒の丘

二、過去(むかし)は消えた

しんきろう

どっこい 今を生きている

傷つけ あきらめ すてた恋

ぐちってどうなるものでなし

ここはトレセン

潮騒仲間

三、窓を開ければ 鹿島灘

仲間がいるさ 一人じゃないよ

なぐさめ はげまし 助け合い

明日を信じて 生きるのさ

ここはトレセン

潮騒ブルース

※石津さんは地元(鹿嶋市沼尾在住)における潮騒支援者の一人です。この作品は、元ミュージシャンの入寮者が曲を付ける予定です。

近藤恒夫氏インタビュー「薬物依存と回復の権利」VOL2

「まあカリスマもいいんだが、ダルクがカリスマを必要とする時代はもはや終わった」

—Q 一般に障害者団体には当事者の自助活動にとどまらず、「国にもの申す」圧力団体化する傾向がありがちです。いつの間にか政治性を帯びて声高に権利を求める動きになる。ダルクはそうなりませんね。

近藤 それは、私たちの活動が一点に絞られているから。横道にそれたり、変なところに行かないんだろ。うな。ダルクというのは、まだ苦しんでいる薬物依存者を手助けすることだけ。それが唯一の指針になる。

じゃあ、それ以外はやらないのかというと、実際には薬物乱用防止なんかでやっているわけだけれども、

とりあえずその肝心要のところだけはきっちりやっていかないと、活動がぶれていくんだろ。うな。真ん中の筋のところ、そこがしっかりしていないとスライスしたりフックしたりする。

もう一つは、私たちがパワーゲームとは無縁なこと。そうした発想を持たない。依存症の回復は自分を変えていくことだから、他人をコントロールしたり管理したり

しない。だから、ダルクは指導者をつくらなかった。横のつながりだけで、日本では当たり前のピラミッド型の組織化をしなかった。施設だから責任者は置くけど、みんなを一番下で支える役割にすぎない。

—Q 指導者をつくると権威や権力が生まれ、支配と依存の関係ができてしまいます。ダルクには権力構造を無化する不思議なメカニズムがありますね。

近藤 依存症の回復には大きな壁だからね。そうは言っても、実際はカリスマのようなリーダーもいる。反省を込めていえば、これまではダルクの歴史は僕の歩みと同じだったから、結果的に僕がカリスマのように見られてきた。僕と違ってカリスマを「売り」にしているものもあるけど…。

まあカリスマもいいんだが、カリスマっていうのは一つの活動に何人もいない。それにダルクがカリスマを必要とする時代はもう終わった。ダルクも知名度が高まり、1県1ダルク近くにまで増えたから。次はちゃんとした土台をつくっていくという時代に入ったんじゃないかな。

—Q でも、ダルクには“引退”はありませんよ。「老兵は死なず、ただ消え去るのみ」(ダグラス・マッカーサーの言葉)とはならない。近藤さんは生涯現役を貫いてください。なんていったって、近藤さんは日本

における依存症問題のパイオニア的な存在ですから。近藤さんが苦しんでいた30年以上前は、依存症という概念はなかったでしょう。

近藤 アルコール依存の人々も中毒といわれていたよね。アルコール中毒とかね、あの頃は「毒」の時代だった。

—Q そのような状況で、近藤さんは札幌マックの設立に尽力された。亡くなったロイ(ア

ッセンハイマー米国メリノール宣教会神父)さんと一緒に。そしてロイさんからマックの所長に任命された。

近藤 僕は元来、アルコールは好きではない。その分、高校時代から本格的にギャンブル、ばくちにのめり込んだ。そしてクスリ(覚せい剤)と出あって、その万能感でギャンブルにますますのめり込んだ。まあ、それもクスリでボロボロになって、最後は「底つき」したわけだけれど。

だから、僕はアルコール依存症ではないから、長になろうとなんか思っていなかったけど、ロイさんは並み居るアル中の中から僕を選んだ。なんで選んだのかよく分からないが、責任者になぜか僕を選んだ。

(次号に続く)



受刑者のみなさんからの手紙～「潮騒通信」を読んで～**■飯と寝る所にありつきたいだけの怠け者も**

潮騒通信5月号の1面の栗原さんのお話を拝読致しますと、誰でも困って頼って来る人を受け入れようという運営原則から、どうしても回復プログラムにすら付いて来れない人もいらっしゃるようですが、70名もの依存症の人達が集まれば、本気で依存症と闘おうと思う人ばかりではなく、中には長い間生保（生活保護）をあてにして、まったく労働意欲なんてものもなく、飯と寝る所にありつきたいだけの本物の怠け者も少なくないのでしょうね。ぬるま湯に浸かったような楽な生活に慣れてしまっ、自主的に自立をしようという気持ちを元々、持ち合わせていない人に、何を言っても無駄なことのように思います。一度受け入れた以上、簡単に投げ出すこともできないのしょうから、本当頭が痛い所ですネ。折角、ファイザープロジェクトが本格的にスタートして、頑張っ、汗を流している仲間の皆さんの姿を誌面にて拝見することで、大勢の依存症の人達が勇気づけられていることでしょう。 (北海道・OK)

■「生きて行くことがどうにもならなくなった」

社会の健常者の目線からは、ただの「ポン中」でしかない私ですが、世間からひんしゅくを買うだけのマイナス人生を反省せず、それが自分には正当な人生だと開き直ってきた厚顔無恥な心に今さらながら恥じ入るばかりです。12ステップの1はアディクションについて「無力であり、生きていくことがどうにもならなくなったことを認めた」ですが、私なりに改めて生きて行くことの意味を考えてみました。当たり前のことですが、生きることとは、人間が造り上げてきた社会というルールの中で生活してくことだと思います。私の場合はその枠組みから外れっぱなしで、文字通りステップ1の「生きて行くことがどうにもならなくなった」人間です。

今後、社会の枠組みの中で行動して生きて行くには、正しく依存の問題と戦い続けること。私は反社会的な暴力団組織に長く身を置いてきたためか、その陰が言動に表れるようです。やはり、どこかに染みついているようです。意識していないだけに始末が悪いですね。社会で生きていくためには、そういう自分を直していくことだと思います。こう思ったのは、決して過去を隠すためではなく、自分が外道を歩いてきたと認めたからなのです。自分をアディクト（依存症者）だと認めたからで、自分の病気であるアディクションの問題と向き合い、戦うことを決意したのです。人間だからこそ、社会の枠組みの中で生きたいと思う次第です。 (北海道・KS)

■北海道ダルクの人が「シャブ教」で来訪

…通称「シャブ教」（受刑者に対する薬物離脱教育プログラム）のメンバーに選ばれ、先日、1回目の「シャブ教」に行ってきました。北海道ダルクの施設長のアールさんという人と、グッチさんという人がミーティングをしに来訪してくれました。まず「アノニマスネーム」を個人で考えてネームプレートに書き、「アディクトの〇〇です」と皆で言うことから始まりました。なんだか初めてのことであり、緊張してしまいました（笑）。合計6回予定されています。なるべく「パス」しないようにと思っています。この便りが栗原さんの元に届くころは残刑も2カ月を切っていることと思います。「今日一日」を忘れずに、社会復帰しても“忍耐”と“辛抱”でなんとか生活していこうと考えております。 (北海道・OK)

■私は現在、更生保護施設を希望しています

潮騒という所は、同じ悩みや苦しみを、そして同じ目的（依存症からの回復）を持った仲間が生活しているところだと思います。互いに語り合い、励まし合い、慰め合い、助け合い、そして手を取り合って喜んだり、悲しんだり、共感し合えた時、人は人間として一人じゃないんだと、安心するものなのかもしれません。行き詰まり、諦めるようになった時も、もう一度頑張ってみようと思え、道から外れそうになった時も自分を思ってくれている仲間が頭に浮かび、急ブレーキをかけてくれる——私なりに栗原さんの活動を、そう理解しました。

今、私の心情を正直に話しますと、色々のことを心配して下さっている栗原さんには不快かもしれませんが、私は現在、更生保護施設を希望しています。受け入れてもらえる可能性は低いのですが、今の考えとしては保護会に受け入れて頂けるのが一番なのかな、と思えるのです。この考えというのは、たぶん薬物依存症という絶対に完治しない病気に対しての、私の考え方が甘いのかもしれません。いえ、それ以前に私自身が依存症だという自覚がないのだと思います。

それでいながら今は出所後いかにして薬物に近づかないようにするのか、ということを一人で考え、止められることを前提にして生活設計を立てたりしています。でも、なんていうか出所後のすべてのことに自信が持てないというのが実情です。出所後に薬物から離れるには、私は今まで付き合ってきた殆どの人と縁を切らねばなりません。正直、今は孤独との戦いです。本当にズルイ考えですが、最終的には潮騒のお世話になるしかないのかな、とも思っています。 (北海道・TH)

しおさい文芸1

選者 桐本石見

【しおさい川柳】

刑務所も気持ち次第で修業の場

(北海道・正敏)



機の機器に若きら楽し夏の雲

潮騒・豊

機は飛行機のこと、今、若者達が展示の飛行機の
コックピットでも見学しているのか、感嘆と楽しそう
な声がある。私も何度か見学したが、狭いピット内の
天上まで計器類があり、良く確認出来るものだと感動
もしたし、パイロットに憧れもした。窓からの夏の雲
も相應しい句です。

韓流のスラムを訪ね風緑り

潮騒・豊

韓流はいま流行の韓国映画のことですが、そのロケ
地も観光地となって日本から訪ねる人も多い、句の作
者もその地を訪ねたのか。また、スラムはスラム街の
ことだと思いますが、韓国では別の意味かも、そのス
ラムの地も今は若葉の頃で風も緑で清々しい旅の句。



しおさい短歌

気づかざる時間^{とき}を駆け抜け我ひとり まごころさえ道を彷徨^{さまよ}う

(北海道・一夫)

時々と獄舎を照らす月明かり 静寂まして星は輝く

(北海道・章三郎)

一畳に収まり囚の午睡かな

北海道・章三郎

時折テレビで独房などの報道を見ますが、良く片付
けられていてもどこかに寂しい思いがしますし、そこ
で暮らす身には辛い日々には違いない。楸邨に「死や霜
の六尺の土あれば足る」の句がありますが、「一畳に
収まる」にそれを思う切々と哀れを籠めた一句です。
午睡は昼寝のこと。

春を待つ心一雨待つ思ひ

北海道・章三郎

地方により差異はありますが、二月も半ばを過ぎる
と春の兆しも見え、いよいよ待春の気持ちも深くな
る、ことに北国の人には待ち遠しい春で、今年のように
大雪の地方では尚更である。その春を誘うのは天気で
もあるが、雪が雨に変わるのも春の兆しで一雨毎に雪
も解け野の草の芽も出る、如何にも春を待つ思ひの心
こまやかな句です。



Information

6月中旬～7月中旬行事予定

- 17日 みのわマック研修会
18日 新宿とまりぎ相談業務
20日 千葉県薬物乱用問題研修会
24日 潮騒・家族会、横浜ダルクフォーラム
25日 入寮者6月誕生会
28日 潮騒・映画鑑賞会
7月2～5日 宮崎ダルクフェロウシップ交流会
6～8日 秋元病院メッセージ
10～11 潮騒キャンププログラム(さしま少年自然の家)
15日 茨城ダルク20周年記念フォーラム

編集・発行

特定非営利活動法人

潮騒ジョブトレーニングセンター(本部)

〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱34号
〒314-0006 茨城県鹿嶋市宮津台210-10
TEL/0299-77-9099 FAX/0299-77-9091

潮騒リカバリーホーム(中施設)

〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱56号
〒311-2213 茨城県鹿嶋市中2773-16
TEL/0299-69-9099 FAX/0299-69-9098

潮騒スリークオーターハウス鉾田

〒311-2113 茨城県鉾田市上播木1113-39
TEL/0291-39-4872

E-MAIL k.s-darc@orange.plala.or.jp

ホームページ <http://shiosaidarc.com/>

献金・献品を頂いた方々(4月中旬～5月中旬)

▼献金を戴いた方

内堀 高良 様
高田 武義 様
富井 建夫 様
菅原 佳江 様
(ひたちなか市
更生保護女性の会)
あわや 様
早川医院 様
カシマペットショップ 様
聖明病院院長 近藤直樹 様
堀内 誠 様

▼献品を戴いた方

杉本 勇蔵 様
中川 孝二 様
根崎 彰 様
橋爪 八重子様
大類 美幸 様
石津 信子 様
林 かつ子 様
橋本 睦男 様

☆そのほか匿名の皆様から献品・献金をいただきました。
ありがとうございました。

※発送作業簡略化のため、振込取扱票は
全員の方に同封させて頂いております。
どうぞご理解の程をお願いします。

編集後記

12で触れたように栗原施設長が韓国のダルク開所式に参加しました。その際に宮崎ダルクの人たちと、とても良い分かち合いができたようです。今やダルクも多様化の時代を迎え、いろんなスタイルの運営形態が生まれています。「ダルクとは何か」の問題とも絡むのですが、若い人たちが運営するダルクは、もしかしたら既存のダルクの在り方がもの足りなくなっているのかもしれない。もともと、いい意味での「型なし」がダルクの特徴です。フランチイズのような狭い発想からは自由なはず。とはいえ、わざわざ既存のダルクとのあつれきを生むような動きは好ましくありません。ダルクは「癒しと救い」の居場所であり、「相手を変えるのではなく自分を変える」のがダルクのプログラムです。そのことは忘れてはならない大原則だと思います。(市)

発行所 郵便番号一五七—〇〇七三
東京都世田谷区砧六—二六—二一
特定非営利活動法人 障害者団体定期刊行物協会
(会費を含む) 定価一〇〇円

今月も多くの方から献金・献品をいただきました。心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。おかげさまで潮騒JTCは、回復のためのプログラムを実践することができておりますことをご報告いたします。今後ともご支援くださいますよう、なにとぞ宜しくお願い申し上げます。